

第一章…温泉旅館は、想定外の超大型イベント！？

「わあああああ！ 見て見て、先生！ この部屋、めちゃくちゃ広いよ！ これ、完全にラスボスの手前にあるセーブポイントの豪華版じゃない！？ いや、それどころか隠しステージのボーナスルームかな！？」

旅館の仲居さんに案内されて部屋に入るなり、モモイは履いていたサンダルを放り投げるように脱ぎ捨て、畳の上をドタドタと駆け回った。

普段のミレニアムでの騒がしさそのままに、彼女のポニーテールが元気に揺れる。背負っていた大きなリュックを適当に放り出すと、彼女は縁側の方へ飛びつき、障子を勢いよく開けた。

「ひょおお……！ 絶景！ 先生、見てよこの景色！ グラフィック設定を最高画質にしても、こんなに綺麗な山は見られないよ！ これ、レイトレーシングどころの騒ぎじゃないね！」

はしやくモモイの姿を後ろから眺めながら、俺は苦笑して荷物を置いた。

今回の温泉旅行。いつもトラブルばかり起こしてはユウカに叱られているゲーム開発部だが、たまには息抜きも必要だろうということで、俺がモモイを誘ったのだ。もちろん、他の部員たちにも声をかけたのだが、今回はたまたまモモイと二人きりのスケジュールが合った。

……正直、二人きりというのは、教師として少し意識しすぎる部分もあったのだが、当の本人はこの通り、全力でイベントを楽しんでいる。

「ほら、モモイ。まずは落ち着いて。お茶でも淹れるから」

「あはは、先生は相変わらずマイペースだなあ！ でも、それもいいかも。この『温泉旅行・癒やしクエスト』、まずは休息コマンドから入るのが正攻法ってことだよね！」

モモイはどさりと座卓の前に座った。

だが、その座り方は相変わらずだ。女の子らしいしとやかसानんて欠片もなく、あぐらをかいて、膝を立てる。ミニスカート ofs サスペンダーが少し食い込んで、彼女の幼いように、実はかなり主張の激しい身体 of ラインを強調していた。

「ねえねえ、先生！ お茶より先にさ、あれやろうよ。お茶菓子！ この旅館限定の『温泉饅頭』ってやつ、アイテムとしての回復量、相当高いと思うんだよね！」

「はいはい。今出すよ」

俺がお菓子の包みを開けると、モモイは目を輝かせて饅頭を頬張った。

「んんっ！ 甘いっ！ HPだけじゃなくてMPまで全回復しちゃうよ、これ！ ふふーん、先生と一緒に食べるから、さらにバフがかかっているのかも？」

そう言って、モモイはいたずらっぽく笑う。

その笑顔はいつもの元気を彼女そのものだが、ふとした瞬間に、窓から差し込む夕日が彼女の白い肌を赤く染める。

……そういえば、さつきから気になっていたことがある。

モモイは小柄な部類に入るし、普段のダボツとしたコートやガーリーな服装では隠れが

ちだが、こうして間近で座っていると、その胸元のポリウムが尋常ではないことに気づかされる。

あぐらをかいて前かがみになるたび、吊りスカートの胸当て部分が、こぼれんばかりの膨らみに押し上げられて、今にもボタンが弾け飛びそうだ。

「……？ どうしたの、先生？ そんなにジロジロ見て。あ、わかった！ モモイさんの食べっぷりが良すぎて、自分の分がなくなるって警戒してるんですよ！ 大丈夫だよ、半分こしてあげるから！ ほら、あーん！」

「いや、そういうわけじゃ……」

差し出された饅頭を断る間もなく、モモイの指先が唇に触れる。
無防備な彼女の行動に、俺の鼓動が少し速くなる。

「……あ」



モモイも、自分のしたことの距離感にようやく気づいたのか、顔をバツと赤くした。

「え、えへへ……なんか、こういうのって、恋愛シミュレーションゲームの重要フラグっばいよね。……先生、今のシーン、好感度パラメーター上がった？」

「……さあ、どうだろうな」

「むー！そこは『爆上がりだよ、モモイ！』って言うところだよ！シナリオライターの私としては、ここで選択肢…『抱きしめる』が出てきてもいいくらいだと思っただけだよー！」

冗談めかして言う彼女だが、その目はどこか期待に満ちているようにも見えた。

変な空気になるのを誤魔化すように、モモイは勢いよく立ち上がった。

「よ、よし！腹ごしらえが終わったら、次は装備変更だね！温泉旅館といえは……浴衣！これを装備しないと、温泉ステージには入場できない仕様なんだから！」

彼女はクローゼットへ突進し、用意されていた浴衣を引っ張り出した。

「先生！ どっちがいいかな？ この青っぽいやつと、ピンクっぽいやつ。……やっぱり、モモイさん的にはピンクかな？ 可愛さ補正值が高そうだし！」

「似合うと思うよ、モモイなら」

「でしよでしよ！ じゃあ、さっそく着替えてくるから、先生はここで待機！ 画面をスクロールさせちゃダメだよ！」

モモイは鼻歌を歌いながら、着替えスペースへと消えていった。
しばらくして。

衣擦れの音と、何やら「うー、うー」と唸るような声が聞こえてきた。

「……モモイ？

大丈夫か？」



「せ、先生……ちよつと、助けて……。これ、物理的な不具合が発生してる気がする……。！」
心配になって声をかけると、カーテンの隙間から、顔を真っ赤にしたモモイがひよこつと顔を出した。

彼女は浴衣を羽織ってはいるのだが、帯がうまく結べておらず、胸元がはだけてしまっている。

「どうしたんだ？」

「あ、あのね……この浴衣、サイズ設定がおかしいよ！ 身丈はいいんだけど、この……胸のあたりのポリゴンが衝突してるといっつか、帯を締めようとすると、全部押し出されちゃうっていうか……！」

彼女が困ったように胸元を押さえるが、そのせいで、浴衣の合わせ目から白い肌と、驚くほど豊かな膨らみの溪谷が露わになっていた。

普段の彼女からは想像もつかないような、圧倒的な「暴力」とも言えるほどのポリウム

だ。

「先生、ちょっと手伝ってよ……。これ、一人で結ぶの無理ゲーだよ！」

「えっ、俺が？」

「いいから！ 先生は私の『パートナーキャラ』でしょ！？ こういう時は、協力プレイで難関を突破するのが基本なんだから！」

半ば強引に、俺はモモイの背後に回るようになった。

目の前には、浴衣から覗くモモイのうなじ。そして、振り返り気味に俺を見る、潤んだ瞳。

……そして、何より。

俺の手が彼女の腰に回ると、浴衣越しでも伝わってくる、その熱と柔らかさ。

「あ……」



モモイが小さく吐息を漏らす。

帯を回そうとするたび、彼女の大きな胸が腕に触れそうになる。というか、意識せずとも、その柔らかな重みが手に伝わってしまう。

「せ、先生……。なんか、こうやって後ろからされるのって……。イベントのカットシーンみたいだね」

「……じっとしててくれ。結びにくい」

「ん……。わかってるけど……。あ、ちょっと、そこ、きついかも……。あんまり締めると、胸が苦しいよ……」

モモイが身をよじると、さらに密着度が増す。

彼女の甘い香りが鼻孔を突き、俺の理性をじりじりと削っていく。

「……できたぞ」



なんとか帯を結び終え、俺が手を離そうとした、その時。

モモイがぐるりと振り向き、俺の服の裾をぎゅっと掴んだ。

「……先生」

「モモイ？」

いつもの騒がしさはどこへやら、彼女は上目遣いで俺を見つめていた。

顔は耳まで真っ赤で、呼吸も少し荒い。

浴衣の胸元は、帯で締められたことによって、より一層強調され、今にも弾けんばかりに盛り上がっている。

「あのね……。温泉に行く前に……ひとつだけ、確認しておきたい『クエスト』があるんだけど」



「クエスト？」

「うん……。……。先生。今の私は、ゲームのキャラじゃなくて……。ちゃんと、一人の女の子として、見えてる……。？」

その声は震えていた。

いつもはゲーム用語で煙に巻く彼女が、剥き出しの感情をぶつけてきている。

俺が答える代わりに、彼女の肩に手を置くと、モモイはビクッと身体を震わせた。

「……。先生の顔、すごく近いよ……。これ、ムービーシーンだったら、もうすぐ暗転して次のチャプターに行くところだよね……。」

モモイはそう言いながら、自分から目を閉じた。

長い睫毛が震えている。

夕暮れの静かな部屋。

温泉の湯気がどこからか香ってくるような気がした。



「……クリア、していいよ。先生になら……全部」

消え入りそうな声で呟いた彼女の唇が、わずかに開く。

俺は、その熱を求めるように、ゆつくりと顔を近づけていった。

第10章…秘湯の混浴エリアは、攻略不可避の密着イベント!?

「わ、わわっ……!?!? これ、本当に混浴なの!?! バグじゃないよね!?! 運営の設定ミスじゃないよね!?!」

脱衣所から一歩足を踏み入れた先。

湯気で白く霞む大浴場を見渡して、浴衣をぎゅっと握りしめたまま立ち尽くす。
貸し切りとはいえ、広い。

岩造りの露天風呂からは、夜の静寂に包まれた山々が見える。



「……あ、あのね。一応、心構えはできてたんだよ？ シナリオライターとして、こういう『温泉回』の重要性は熟知してるし！ でも……いざ実装されるとなると、処理落ちしちゃうっていうか……」

真つ赤な顔をして、視線を泳がせる。

意を決したように、震える手で浴衣の帯に手をかけた。

するりと帯が解け、床に落ちる。

重力に従って、はだけていく布地の隙間から、白く、あまりに眩しい肌が露わになった。

「ひゃう……っ！ み、見ないで！ ……あ、ううん。やっぱり見て！ ……どっち！？
もう、自分でも何言ってるかわかんないよお！」

慌てて両腕で胸を隠そうとするけれど。

その腕からはみ出してしまうほどのポリウレーム。

普段の服で隠されていたのが奇跡と見えるほど、豊満で、柔らかな果実のような双丘。一步踏み出すたびに、それはぶるんと重たげに揺れる。

「…………つ。先生、先に、入ってて…………！ 後から、こっそり…………ロゲインするから…………！」

促されるまま、先に湯船に浸かり、彼女を待つ。

しばらくして、チャブ、と小さな水音が響いた。

湯気の中から、おずおずと近づいてくる影。

お湯に肩まで浸かった彼女が、すぐ隣に滑り込んできた。

「…………ふう。…………温かいね。なんか、フィールド魔法『癒やしの聖域』がかかっているみたい…………」

そう言って、無理に笑おうとしているけれど。

お湯の中で、彼女の肌が俺の腕に触れる。

熱い。

お湯の温度のせいだけじゃない。

彼女の体温が、ダイレクトに伝わってくる。



「……ねえ。……こつち、向いて？」

囁くような声。

顔を向けると、すぐそこには、水滴を弾く真っ赤な頬。

そして、お湯に浮かぶようにして、その巨大な胸が俺の胸板に押し当てられた。

「……っ。……もう、我慢できないよ。先生の顔見ると、頭の中のフラグが全部バキバキに折れちゃうんだもん……」

彼女の手が、俺の首に回される。

引き寄せられるまま、唇が重なった。

「んむ……、……んっ。……ふああ……」

最初は、触れるだけの、確認するようなキス。



けれど、一度繋がってしまおうと、止まらない。

絡み合う舌が、甘い音を立てる。

彼女の口内は、温泉の熱よりもずっと熱くて、とろけそうなほど甘かった。

「……………んんう！ ……はあ、……………ふっ。……………すご、い……………。頭の中、完全にフリーズしちゃった……………」

離れた唇から、銀色の糸が引く。

潤んだ瞳が、熱っぽく俺を射抜く。

彼女の胸が、激しい鼓動を刻みながら、俺の腕を圧迫していた。

「……………先生。……………触って？ ……ここ……………すぐ、熱いんだよ……………？」

促されるまま、お湯の中に手を沈める。

指先が触れたのは、驚くほど柔らかく、けれどパンと張り詰めた、彼女の自慢の双丘。片手では到底収まりきらない。



指の間から、柔らかな肉が溢れ出す。

「ひゃんっ！ ……あ、 ……んう ……っ！ ……そこ、 ……指、食い込んでる ……っ」

優しく、けれど力強く揉み上げると、彼女は俺の肩に顔を埋めて、震える声を漏らした。
湯船の中で、彼女の身体が弓なりに反る。

吸い付くような肌の感触。

揉むたびに、指先から伝わってくる、重み。

「 ……あ、あはっ。 ……これ、すごい ……。私のHP、どんどん削られてるのに ……なんだか、すごく ……気持ちいい ……」

彼女の指が、俺の腕をぎゅっつと掴む。

爪が少し食い込むほどの力。

それだけ、彼女も限界に近いということだろう。



「……もつと……強くして……。……壊しちゃってもいいよ？ ……私、先生になら……。デバッグ、されちゃいたいもん……」

その言葉に理性が弾けた。

両手でその巨大な塊を掴み、持ち上げるようにして捏ねる。指が沈み込み、彼女の形の良い先端が、俺の掌を刺激する。

「んあああああつ！ ……んっ、……。ふ、う……。っ！ ……あつ、い……。胸の中まで、先生に……。かき回されてるみたい……。っ！」

彼女の喘ぎ声が、大浴場に反響する。

お湯の音と、混ざり合う吐息。

俺は、その膨らみに顔を埋めた。

温泉の香りに混じって、彼女自身の、甘い香りが立ち昇る。

「……あ、先生……。？ なに、しよ……。うと、して……。っ！？」



その先端を、口に含む。

コリッとした感触が舌に触れた瞬間、彼女は「ひいっ！」と短い悲鳴を上げて、大きく身体を跳ねさせた。

「……………んう！……………うそ、そこ……………吸ってるの……………!? やだ、……………恥ずかしい、よ……………っ！
……………赤ちゃん、みたい……………っ」

恥ずかしがりながらも、彼女は俺の頭を、その大きな胸に抱き寄せた。

もっと吸ってほしいと言わんばかりに。

舌で舐がし、強く吸い上げると、彼女は情欲に染まった声を上げ続ける。

「あ、……………ん！……………ああっ、……………ふあ……………っ！……………だめ、……………そこ、変な感じ……………っ！
……………お腹の奥が、キyunキyunしちゃう……………っ」

彼女の大きな胸は、吸えば吸うほど、さらに熱を帯びていく。



まるで、本当にミルクでも溢れ出しそうなほど、パンパンに張っている。

「……ねえ。……そんなに、美味しい……？ ……いいよ、もっと……飲んで？ ……私の、全部……あげるから……」

トロンとした目で、彼女は俺の頭を撫でる。

その表情は、いつもの元気な少女ではなく、慈愛と欲情に満ちた、一人の女のものだっ
た。

「……あ、んっ！ ……あはあ……。……これ、もう……隠しイベントとかのレベルじゃないね……。……完全に、メインストーリーの……クライマックスだよ……」

彼女の指が、俺の髪を掻き回す。

激しく揉まれ、吸い上げられる刺激に、彼女の身体は小刻みに震え続けた。

「……はあ、……はあ。……先生……。……ここじゃ、足りない……」

彼女が耳元で、甘く、湿った声で囁く。

「……………ベッドに、行こう？ ……続き、……………セーブなして……………最後まで、いっちゃいたいんだ……………」

潤んだ瞳で俺を見つめる彼女を、俺は力強く抱き上げた。

お湯から上がった彼女の身体は、真っ赤に上気し、滴る水滴が月明かりに反射して美しく輝いていた。

「……………落とさないでね？ ……このステージのクリア報酬……………、とっておきのやつ、用意してるんだから……………」

俺の首にしがみつきの、幸せそうに微笑む彼女。

その柔らかな重みを感じながら、俺たちは、さらなる熱狂が待つベッドルームへと足を進めた。



第○章…寢室へのロード完了！　ここからは本番、ノンストップ・ボーナスタイム！

バスタオル一枚で抱え上げられたまま、部屋へと戻る。

温泉の熱が引かないどころか、先生の腕の温度が加わって、私の体温計はとつくにレッドゾーンを突破してた。

畳の香りが鼻をくすぐる。

でも、それ以上に、すぐ近くにある先生の匂いが、私の理性をじりじりと削っていくんだ。

「ふええ……、……あはは。なんか、こうやってお姫様抱っこで運ばれるのって、完全にエロティック後のスペシャルムービーだね。……あ、でも、ここからが本当の『隠しステージ』の始まりなのかな？」

シーツの上にそっと下ろされると、バスタオルがわずかにはだけて、さっきまでお湯の中で散々可愛がられた胸が、またぶるんと重たげにこぼれ出した。

照明を少し落とした部屋の中、私の肌はさつきよりもずっと赤く、熱を持っているのが自分でもわかる。

「……………あ、先生……………。そんなに……………そんなに見つめられると、私、バグっちゃいそうだよ……………
んう、でも……………もつと、見てほしいかも」

自分からバスタオルを横に退けて、私は全裸の姿を晒した。

温泉の熱でピンク色に染まった身体。

そして、自分でも持て余すくらい、この大きな……………。

「……………ふふ……………驚いてる？……………さつきも触ったでしょ？……………でも、明るいところで見ると、もつとすごいでしょ？……………これ、私の『最強装備』なんだから……………」

そう言って笑ってみせるけど、実は心臓がうるさいくらいに鳴っている。

先生の視線が、私の胸に、お腹に、そしてそのもつと下に注がれるたびに、身体の芯がキュンと震えるんだ。



私は、横たわる先生の身体に這い寄った。

「……ねえ。……私、シナリオライターだからさ。……こういう時の『攻め方』、理論上は完璧なんだよ？ ……だから、ここからは……私のターン、でいいよね？」

震える手で、先生の熱を帯びた部分に触れる。

ドキッとした。

……硬い。

さっきお湯の中で触れた時よりも、ずっと……。

「……はあ、……ん。……すごい、これ……。……先生、……これ、もうフルスロットル状態だね。……あはっ、私の手、……全然足りないよ……」

指先を絡めて、ゆっくと動かししてみる。

先生が漏らす小さな吐息が、私の耳を熱くする。

その反応一つひとつが、私にとっての『会心の出来』のセリフみたいに、胸に響く。

「……………んう、……………はあ。……………気持ちいい……………？ ……もつと、激しくした方がいいのかな。……………それとも、じっくり……………バフをかけるみたいに、優しく……………？」

私は夢中で手を動かし続けた。

時折、先生の顔を盗み見る。

苦しそうに、でも蕩けそうな顔をしてる。

……………ああ、これだよ。

私を書きたかった、最高のシチュエーション。

「……………でも、手だけじゃ……………ちよつと、物足りないよね。……………よし。……………ここは、禁断の『マニュアル操作』に切り替えちゃうよ……………？」

私はゆっくりと身体を沈めて、その熱い先端に顔を近づけた。

……………熱い。

先生の匂いが、ダイレクトに伝わってくる。



「……ん、……はむっ……、……んう……」

口に含むと、口内がパンパンに満たされる。

……大きい。

舌を絡めて、喉の奥まで迎え入れようとするけど、苦しくて、でも、それ以上に昂ぶる。

「……ん、……ちゅぶ……、……れる……、……んんっ……！」

先生が声を漏らすたびに、私の口の中でもその熱が跳ねる。

……ふふ。

先生、今、私の口の中で……すごく震えてる。

私は上目遣いで先生を見つめながら、必死に奉仕を続けた。

唾液が溢れて、顎を伝う。

……恥ずかしいなんて、もう思わない。

今はただ、先生に『最高』って思わせたいんだ。



「……はあっ、……ふ、……ふあ……っ。……んう、……どう……かな……？ ……私の『スキルレベル』……少しは、上がった……？」

口を離して、銀色の糸を引きながら尋ねる。

私の頬は、もう真っ赤を通り越して、熱を出しそうなほど。

「……あ、……でも。……私には、もっと……とっておきの『最終兵器』があったのを、忘れてたよ……」

私は膝立ちになり、自分の胸を両手で寄せた。

巨大な双丘が、ぎゅっと押し潰されて、深い溪谷を作る。

「……これ。……ミドリにも内緒の、……特大ポリウムだよ？ ……先生、……ここに、挟まって……？」



先生の熱を、私の胸の間に挟み込む。

……熱い。

柔らかい肉が、先生の硬い部分を包み込む。

私はそのまま、身体を上下に揺らした。

「……あ、……んっ！ ……ああ……っ！ ……すごい、……これ、……密着度が、さっきまでと全然違う……っ！」

揉み合う胸の肉が、ぐにゅぐにゅと音を立てる。

自分の胸なのに、先生に刺激されて、私まで変になりそう。

先端が先生の肌に擦れて、ツンとした刺激が脳に突き抜ける。

「……はあ、……んんう！ ……先生の……、……おっきいのが、……私の胸を……押し潰してる……っ！ ……あ、……すごい、……ドクドクしてるよ……っ！」

私は夢中で胸を動かし続けた。



先生の首筋に顔を寄せて、熱い吐息を吹きかける。

……もう、止まらない。

ゲームオーバーなんて、絶対にさせない。

「……あ、……ん、……あああっ！ ……先生……っ！ ……もう、……限界……なの……？」

……いいよ、……全部……出して……？」

私は、先生の熱が最高潮に達したのを感じて、もう一度、それを口に含んだ。
喉を大きく開いて、準備する。

「……ん、……んんっ……！！」

熱い奔流が、一気に口の中に流れ込んできた。

……熱い。

ドロリとした感触が、私の喉を、舌を、支配していく。



「……………ん、……………ごきゅ……………っ、……………んっ、……………ごくんっ……………」

溢れそうになるのを、一生懸命に飲み込む。

先生の『命』を、私の身体の中に取り込んでいく感覚。

……………すごい。

私、今……………先生と、本当の意味で……………一つになってる。

「……………はあ、……………はあ。……………ん、……………んむ。……………ふう……………」

最後の一滴まで、丁寧に舌で絡め取る。

顔を上げると、視界が少し滲んでいた。

「……………あは。……………全部、……………飲んじゃった。……………これ、……………完全攻略（フルコンプリート）……………
だよね……………？」

口角を汚したまま、満足げに微笑んだ。



……でも。

先生の目は、まだ終わっていないことを教えてくれている。

私も……まだ、足りない。

お腹の奥が、ジンジンと疼いて、次の『フェーズ』を求めているんだ。

「……ねえ。……次は……私の番だよ……？ ……先生。……私のこと、……ぐちゃぐちゃにして……？」

私はシーツの上に横たわり、脚をゆっくりと開いた。

そこは、もう……温泉よりもずっと、溢れんばかりの熱に支配されていた。

第4章…禁断の最終ログイン！ 限界突破のマルチプレイ

「はあ、……はあ。……ねえ、見て。……私の、ここ。……もう、全然、待機状態（スタンバイ）じゃないんだよ……？」



シーツの上に横たわって、私は自分の両足の間を、少しだけ……恥ずかしさを堪えて、指で広げてみせた。

そこは、もう……さっきの温泉よりもずっと、熱い蜜で溢れ返ってる。

指が触れるだけで、ぬちゅ、って……。

ゲーム開発部の部室で、こつそりエッチなゲームをデバッグしてた時よりも、ずっと……ずっと、淫らな音が響く。

「……あ、んっ！……先生……。……そんなに、見つめないで……。ううん……。……やっぱり、もっと、よく見て……。……私の、中まで……。全部、スキヤンしちゃうみたい……。……」

先生の熱い視線が突き刺さるたびに、お腹の奥が、きゅう、って鳴る。

でも、すぐに繋がるのは……。……なんだか、勿体ない気がした。

だって、この『温泉旅行イベント』、まだ使い切ってない、私の『最強のステータス』があるんだもん。

「……ねえ……。……その前に、もう一回……。……これ、使わせて？……。……さっきよりも、もっと……」

すごいこと、してあげるから……」

私は起き上がって、先生の上に跨がった。

そして、自分でも持て余すくらいこの重たい胸を……両手で、ぎゅーっと、先生の顔に押し当てた。

「……ふふ。……どう？ ……視界、全部……私の胸で、埋まっちゃったでしょ？ ……これぞ、物理演算を超えた……究極の、目隠し（ブラインド）攻撃だよ……！」

自分の胸の間に、先生の熱を……さつきよりも、もっと深く、力強く挟み込む。

胸の肉が、先生の硬いところに、ぐにゅ、って押し潰される感触。

先端が、先生の肌に……熱いところに、チリチリと擦れる。

「あ、……んう！ ……はあ、……んっ！ ……すごい、……先生の……、……ドクドクしてるのが、……胸の奥まで響いてくるよ……っ！」



私は腰を激しく振って、胸で先生を……ゴシゴシと、洗うみたいに擦り上げた。
お湯と汗と……そして、さっきの『名残』が混ざり合って、胸の間が、ドロドロの、ぐちやぐちやになる。

「んあああああつ！ ……はっ、……あ、……んうー！ ……これ、……すごい……
摩擦係数が、……限界を、突破してる……っ！ ……あ、……はあ……っ！」

先生が、私の胸を……外側から、両手で、ぎゅーつと、握り潰す。

大きな手が、私の肉に、深く沈み込む。

その感触だけで、私は……もう、イっちゃいそう。

「……あ、……んっ！ ……いい、よ……！ ……もつと、……潰して！ ……先生の、……
おっきいの、……私の胸で、……折っちゃうくらい……、……激しく、して……っ！」

揉み合うたびに、ぶちゅ、ぶちゅ、つて……淫らかな音が、静かな部屋に響き渡る。
私は夢中で、先生の顔に、胸を擦り付け続けた。

……ああ、……すごい。

先生、……今、……すごく、いい顔してる……。

その顔、……私だけのもの、なんだよね……？

「……はあ、……はあ、……んっ！ ……あ、……先生……、……くる……？ ……あ、……
んんっ……！！」

先生の身体が、ビクン、と跳ねた。

私の胸の間が……一瞬で、熱い、ドロドロとしたもので、満たされる。

ドクドクと、何度も……。

それは、私の胸を伝って、お腹に、シーツに……溢れ出していく。

「……あはっ、……ん、……はあ、……すごい……。……これ、……完全な、オーバーキル
だよ……」

私は、自分の胸にベッタリと張り付いた……先生の『証』を、指でなぞった。

……熱い。

白濁した液体が、私の肌を、淫らに汚している。
でも……。

「……ねえ。……まだ、……終わりじゃないよね……？」

私は先生の目を見つめた。

私の瞳は、もう、潤んで、トロトロに溶けちゃってる。

私は先生の手を引いて、自分の、一番……熱いところに、導いた。

「……ここ。……ずっと、……バグったみたいに、……震えてるの。……先生が、……ロゲ
インしてくれないと、……私……、……壊れちゃう……」

先生が、私の腰を掴んで、ゆっくりと……沈み込んできた。

入口が、みし、みし、つて……。

あまりの大きさに、一瞬、息が止まる。



「あ、……んぐつ……！ ……あ、……は……っ、……おつき、い……っ！ ……先生……、……
中まで、……みっちり……、……埋まっちゃって……っ！」

全部……入った。

私の中に、先生の全部が、……繋がってる。

その圧倒的な存在感に、脳の回路が、一瞬で焼き切れた。

「……あ、……はあ。……んう、……すごい……。……これ、……夢じゃないんだよね……。？
……私、今、……本当に……先生と……。……一つに……。」

先生が、腰を動かし始める。

ぐぶ、……ぬちゅ、……。

重たい音が、身体の内まで響く。

突かれるたびに、お腹の奥の、一番……大事なところが、ギユン、ギユン、って、震えるんだ。



「ひゃんっ！ ……あ、 ……ん、 ……そこ ……っ！ ……そこ、 ……変な感じ、する ……っ！
 ……あああっ！ ……これ、 ……クリティカルヒット、だよ ……っ！」

私は先生の首にしがみついて、夢中で腰を跳ねさせた。

大きな胸が、激しく揺れて、先生の胸板を叩く。

お互いの汗が混ざり合って、ピチャピチャと音が鳴る。

「 ……はあ、 ……はあ、 ……んっ！ ……いい、よ、 ……もつと、 ……奥まで！ ……私
を、 ……突き抜いちやうくらい ……、 ……激しく、して ……っ！」

先生の動きが、どんどん激しくなる。

私はもう、まともな思考なんて、一つも残ってなかった。

ただ、先生に突かれるたびに、目の前が真っ白になって ……。

高い、甘い声が、勝手に喉から溢れ出す。



「……あ、……ん、……ああっ！……あ、……い、……イク……っ！……私、……イッ
ちやう……っ！……先生……っ！」

頭の中のパラメーターが、一気にカンストした。

全身の力が抜けて、私は先生の上に倒れ込む。

中が、ギユウ、ギユウ、って……先生を締め付けるのが、自分でもわかった。

「……はあ、……はあ。……あ、……んう。……ふう……」

でも、先生はまだ、止まってくれない。

私の腰を力強く掴んで、さらに……激しく、奥を突き上げる。

「あ、……あ、……ああっ！……やだ、……もう……っ！……そんなに、……された
ら……っ、……私……、……溶けちやう……っ！」

何度も、何度も。



私は絶頂の余韻の中で、さらに高い波に飲み込まれていく。

……ああ、……これ、……永久コンボだ……。

終わらない、……終わらせたくない……。

「……あ、……先生……。……顔、……出して……。？」

限界が近いことを察して、私は自分から先生を……引き抜いた。

そして、その顔の前に、自分の顔を近づける。

「……ここ。……私の顔……。……先生の……。……いっばいに、して……。？」

先生が、私の頬を包み込む。

そして……。

「……んんっ！！」



熱い、……熱い飛沫が、私の顔に、次々と降り注いだ。

目元に、鼻筋に、頬に。

とろりとした熱が、私の顔を汚していく。

「……んう、……あ……」

少しだけ口を開けて、それを受け止める。

鉄っぽい、でも愛おしい匂いが、鼻を抜ける。

私は、顔にかかった……先生の『全部』を、指で掏って、ペロリと舐めた。

「……あは。……これ、……私の、……最高の……、……クリア報酬……だよ……」

顔をぐちゃぐちゃに汚したまま、私は幸せそうに微笑んだ。

先生の身体の上に力なく横たわり、私はその胸に顔を埋める。

心臓の音が、二つ。

重なり合って、静かな部屋に響いていた。



「……はあ。……なんか、……これ……。……エンディングロール、……流れてきちゃいそう……。……でも……。……まだ、……寝かせないからね……。？」

私は先生の耳元で、弱々しく、でも……。確かな欲望を込めて、囁いた。

「……コンティニュー、……。何度でも、……。付き合って……。？」

最終章…トウルーエンドへ一直線！ 心も身体も、全部フルシンクロ！

顔中に降り注いだ先生の熱い飛沫。

それを指で掬い取って、ゆっくりと口に含む。

舌の上で転がる、濃密で、ちよつとだけしよっぱいような、でもすごく愛おしい味。

「……んっ、……。えへへ……。……すごい。私、先生の『成分』で、コーティングされちゃっ

た……」

ドロドロに汚れた顔のまま、私は先生の胸にすり寄った。

さっき一回ゲームクリアしたばかりなのに。

身体の奥の、一番熱いところは、まだ全然満足してなくて、ヒクヒクって勝手に動いてる。

「……ねえ、先生。……私ね、コンティニューって言ったけど……ほんとは、ここから裏ステージの『本編』だと思ってるんだ」

先生の大きな手が、私の顔にかかった白い跡を、優しく指で拭ってくれる。

その指先が唇に触れた瞬間、パクリと甘噛みして、ちゅうっ、と吸い付いた。

「んむ……、ちゅ、……れる……っ、……んう……」

先生の指に絡みつく私の舌。



そのまま、引き寄せられるようにして、今度は唇と唇が重なり合う。
深く、とろけるようなキス。

さっきの激しいブレイの熱がそのまま残ってて、お互いの唾液が混ざり合うたびに、頭の中のヒューズがまた一つ飛んでいくのがわかる。

「……はあ、……んっ。……先生……。……もう一回、……繋がる？ ……さっきは私の顔だったけど……次は、……私の中に、全部……ちょうだい……？」

私はゆっくりと身体をズラして、仰向けになった。

温泉の熱気と、さっきの情事で、シーツはもうぐっしより濡れてる。

私の脚を、先生の手がゆっくりと開いた。

「……あ、……んっ……。……恥ずかしい……。……そこ、……さっきので、もっと……。ぐちやぐちやに、なっちゃってる……。っ」

自分でもわかる。



入り口から、とめどなく溢れ出してる甘い蜜が、太ももを伝って落ちていくのが。
先生の硬く熱い先端が、そこにゆつくりと押し当てられた。

「……………んう……………っ、……………あ、……………入る……………っ。……………先生の、……………おっきいの……………、……………また、私を……………開いて……………っ！」

ぬちゅり、という淫らな水音と一緒に、限界まで膨れ上がった先生の熱が、私の中を押し広げていく。

二回目なのに。

いや、二回目だからこそ、中の粘膜が異常なほど敏感になってて。

「あ、……………んあああっ！……………あ、……………んっ！……………すごい、……………さつきより、……………ずつと、熱い……………っ！……………奥の奥まで、……………先生の形、……………全部わかるよお……………っ！」

根元まで、みっちり埋め尽くされる感覚。

お腹のぼっこりしたところが、先生の硬さで内側から押し上げられてるのがわかる。

完全にフルシンクロした状態。

エラーもラグも一切ない、完璧な接続（コネクト）。

「……………はあ、……………あ、……………んっ！……………動いて……………っ！……………先生、……………私を、……………ぐちゃぐちゃに、して……………っ！」

私の声に応えるように、先生の腰が動き始めた。

ぐぶっ、……………ばちゅっ、……………ずちゅっ！

さっきよりもずっと重たくて、粘り気のある音が、部屋中に響き渡る。

「ひゃんっ！……………あ、……………んああっ！……………そこ、……………そこ、だめえ……………っ！……………深すぎるっ、……………私、……………おかしくなっちゃおうっ！」

突かれるたびに、私の巨大な胸が、ばるん、ばるんっ！と暴れるように跳ね回る。

先生の手が、その暴れる胸を両側から鷲掴みにして、力任せに揉みしだいた。



「あ、……んっ！ ……胸、……ちぎれちゃう……っ！ ……でも、……気持ちいい……っ！
……先生の手、……すっごく、熱いよお……っ！」

下からは容赦なく奥を突き上げられて。

上からは、ちぎれそうなほど激しく胸を揉まれて。

思考回路が、完全に真っ白にショートする。

「……あはあっ！ ……ん、……あっ、……先生っ！ ……先生っ！ ……大好きっ、……
大好きだよお……っ！」

ただのゲーム開発部のモモイじゃなくて。

一人の女の子として、先生のこと、どうしようもなく好きで。

その気持ち、身体の奥の快感と混ざり合って、爆発しそうになる。

「……んあああっ！ ……あ、……あ、……くるっ！ ……先生、……私、……もう、……っ！」



目の前がチカチカと点滅し始める。

先生の動きも、限界を超えて、さらに激しく、深く、乱暴になっていく。
お腹の奥の、一番敏感なところを、何度も、何度もすり潰される。

「……………あ、……………んっ！……………いいよっ、……………先生っ！……………中に出してっ！……………私の奥の奥まで……………っ、……………先生のデータで、……………上書きしてえっ！！」

私の中から、ぎゅううっ！と先生を締め付ける。

絶対に逃がさないように。

私の全部で、先生の全部を受け止めるために。

「あ……………、……………い、イクッ……………！！……………イクウウツ！！……………先生ええっ！！」

絶頂の瞬間。

私の中で、先生の熱が、ドクンッ！と大きく跳ねた。



「……………あ、……………あつ、……………んあああああつ……………!!」

熱い。

信じられないくらい熱い奔流が、私の奥深く、子宮の口に直接叩きつけられる。ドクドクと、脈打つたびに、とめどなく注ぎ込まれてくる先生の『命』。

「……………あ、……………はあ、……………あ……………つ。……………中、……………いっぱい、出てる……………つ。……………お腹の中、……………真つ白に、染まっちゃうよお……………つ」

熱い液体が、私の中を満たして、入り口から溢れ出しそうになる。

私は先生の背中に腕を回して、その大きな身体をぎゅつと抱きしめた。

一緒に達した余韻で、二人の身体が、ビクビクと小さく痙攣を続けている。

「……………はあ、……………はあ。……………あ、……………んう……………」

しばらくの間、重なり合ったまま、荒い息だけが部屋に響いていた。



私の中からゆっくりと先生が抜け出すと、ぼっかりと空いた隙間から、二人の混ざり合った熱い証が、とろりとシーツに零れ落ちた。

「……………あは。……………こぼれちゃった。……………でも、……………私の中、……………まだ先生で、いっぱいだよ……………」

私は、隣に寝転がった先生の胸に、すりすり頬を擦り寄せた。

汗だくで、髪もボサボサで、絶対に変な顔してると思うけど、でも、今、すっごく……………すっごく幸せ。

「……………ねえ、先生。……………すっごく、気持ちよかった。……………私ね、知識としてはいろいろ知ってたつもりだけど……………こんなの、バグレベルだよ。……………完全に、私のキャパシティ、超えちゃった」

上目遣いで先生を見つめると、先生も、すごく優しい顔で、私の頭を撫でてくれた。

『俺も、すごく気持ちよかったよ。モモイは最高だった』

そんな風に言ってくれる先生の声が、耳から脳に直接染み込んでくる。

「…………えへへ。…………やったあ。…………先生から『最高』の評価、もらえちゃった。…………これ、私にとっての、一番のトロフィーだよ」

先生の腕の中にすっばりと収まって、目を閉じる。

温泉の匂いと、先生の匂いと、エッチな匂い。

全部が混ざり合ったこの空間が、たまらなく愛おしい。

「…………先生。…………このイベント、…………一回きりじゃなくて、…………定期開催の『レイドボス』扱
いで、…………また、やろうね？ ……私、…………もっともっと、レベルアップしておくから…………」

とろけるような甘い吐息を漏らしながら、私は先生の唇に、最後のおやすみのキスをした。

温泉旅館の夜は、まだまだ長い。

でも、このトゥルーエンドの先には、きっと…………もっと甘くて、もっと幸せな、二人だ

けの『神ゲー』が待っているはずだ。

エピソード…日常クエストは、いちやらぶ隠しルートへ分岐中!?

「ふいっ……!! ミッション・コンプリート! シャーレの先生の部屋まで、誰にも見つからずに潜入成功だよ!」

ガチャリ、と内鍵をかける音が響く。

振り返ったモモイは、いつものサスペンダー付きのミニスカート姿だったけれど、その顔はいたずらを成功させた子供みたいに、そして……少しだけ、夜の匂いを知った女の子みたいに、熱っぽく上気していた。

「もう、大変だったんだから! ユウカったら、また部費のことでネチネチお説教してくるし! おまけにミドリにまで、『お姉ちゃん、最近スマホ見てニヤニヤしすぎ。気持ち悪い』って怪しまれちゃうし!」



ぶんすかと怒ったフリをして見せるけれど、すぐにその表情は蕩けるような甘い笑顔に変わる。

「でもね……ミドリにも、アリスにも、ユズにも内緒。この『先生との秘密の追加コンテンツ』は、私だけの特権なんだから！」

モモイはリュックを放り投げると、迷うことなく俺の膝の上へと飛び乗ってきた。

ドスン、という重みと一緒に、彼女の規格外の膨らみが、俺の胸板にむにゅつと押し付けられる。

「……………えへへ。先生の匂い……。温泉旅行の時から、ずっと……。これ、我慢してたんだよ？ ……ねえ。デイリークエストの消化、しよ？」

言うが早いのか、彼女は自分の上着を乱暴に脱ぎ捨てた。

シャツのボタンを外すと、ブラジャーすら着けていない、あの温泉の夜と同じ……。暴力

的なまでの双丘が、ぼるんっ！ と弾み出てくる。

「……………あ。……………先生、もう……………こんなにバグッてる」

俺の股間の膨らみに気づいたモモイは、妖しい笑みを浮かべて、ズボンのジッパーを下ろした。

弾き出された熱の塊を見るなり、彼女の瞳がトロンと潤み始める。

「……………いただき、ます……………っ。……………んむっ、……………ちゅぶ……………っ、……………れるお……………」

ためらいなく顔を沈め、限界まで反り返った先端を口に含む。

温泉の時よりも、ずっと手慣れた……………いや、俺を喜ばせることに特化したかのような、滑らかな舌使い。

「……………んう……………っ、……………じゅるっ……………ちゅばあ……………っ。……………んん……………っ、……………おいし……………っ」



息継ぎのたびに銀色の糸を引きながら、モモイは俺を見上げてくる。
その視線が、たまらなく淫らだ。

「……ねえ。……私、レベルアップしたって言ったでしょ？ ……口だけじゃ、もったいな
いもんね。……ほら、……これ……」

彼女は自分の巨大な胸を両手で寄せ集めると、俺の熱い柱を、その深い谷間へと挟み込
んだ。

たつぷりと彼女の唾液を吸った俺の先端が、柔らかな肉に挟まれて、ちゅるり、と滑る。

「……あ、……んっ！ ……はあ、……すごい……っ。……先生の、……ドクドクしてるの
が……胸の奥まで、伝わってくるよお……っ」

ぐにゅり、ぐにゅり、と。

モモイの柔らかな肉が、俺の熱を搾り上げるように擦れ合う。

彼女自身の体温と、滴る唾液の潤滑で、信じられないほどの快感が脳を焼き切っていく。

「あはっ……！ ……いいよっ、……先生、すごくいい顔してる……っ。……私の胸で……
いっぱい、気持ちよくなって……っ？」

先端が彼女の顎に擦れるまで、深く、激しく、胸の肉を擦り上げてくる。

時折、ちゅっ、と先端にキスを落としながら、彼女は恍惚とした表情で奉仕を続けた。

「……んあっ！ ……あ、……先生……、……ビクビクしてる……っ。……でも、……ここ
で出しちゃダメ、だよ……？ ……私の、……ここが……、……もう、限界だから……っ」

彼女は俺から離れると、ソファに俺を押し倒し、そのまま上に跨がってきた。

下着をずらし、蜜でドロドロになった秘裂を、俺の先端に擦り付ける。

「……はあっ、……んう……っ！ ……先生……、……ロゲイン、して……っ！ ……私の
中、……全部……、……埋めてえっ……！」



俺の腰を両手で掴み、彼女は一気に腰を下ろした。

ぬちゃああっ！ という卑猥極まりない水音と一緒に、俺の熱のすべてが、モモイの狭く熱い胎内へと飲み込まれていく。

「あ……んぐあっ！……あ、……あああっ……！……す、ごい……っ！……先生
の……、……おっきいの、……全部、入ったあ……っ！」

温泉の夜の記憶が、鮮明に蘇る。

いや、あの時よりもさらに熱く、柔らかく俺を締め付けてくる。

モモイは俺の首にしがみつき、自ら激しく腰を跳ねさせ始めた。

「ひゃんっ！……あ、……ああっ！……おくっ、……奥の、一番深いところ……っ、……
先生で、……押し潰されるうっ……っ！」

ばちゅんっ！ばちゅんっ！

彼女が腰を打ち付けるたびに、俺の身体と彼女の太ももが激しくぶつかり合う。



振り乱れるポニーテール。

そして、顔にぶつからんばかりに暴れ狂う、巨大な二つの果实。

「…………んああっ！ ……あ、…………先生っ！ ……動いてっ！ ……下から、…………もつと、激しく…………突き上げてえっ！！」

彼女の懇願に応え、俺も腰を跳ね上げる。

重力が手伝って、普段よりもさらに深く、彼女の子宮の口をガンガンと叩く。

「あ、…………んああああっ！ ……そこっ！ ……そこ、ダメえっ！ ……私、…………バグっ
ちやうっ！ ……頭の中、…………真っ白に、なっちやうよおっ！」

泣きそうな声で喘ぎながら、それでも彼女は俺を離そうとしない。

中の粘膜が、生き物のようにうねって俺の熱を搾り取るうとする。

「…………あ、…………んっ！ ……先生っ！ ……すっごく、気持ちいいっ！ ……先生の、…………

ぜんぶが……、……私の中で、……ぐちゃぐちゃになってるの……最高だよおっ！」

俺も限界だった。

彼女のあまりにも素直な快感の表現と、締め付けの強さに、理性が吹き飛ぶ。

「……あ、……くるっ！ ……先生っ、……私、……イッちゃうっ！ ……一緒にっ、……一緒に、イコっ！？」

「……モモイ……っ、中、出すぞ……っ！」

「うんっ！ ……出してえっ！ ……私の奥に……、……先生の熱いの、……いーっばい、
注ぎ込んでええっ！！」

俺が腰を最奥まで引き絞った瞬間、モモイの身体が大きく弓なりに反り上がった。

「あ……、……イッ……、……イクウウウッ！！ ……ああああっ！！」



強烈な絶頂の収縮が俺を襲い、限界を迎えた白濁の奔流が、彼女の最奥へと一気に解き放たれる。

ドクンツ、ドクンツ、と脈打ったたびに、モモイの子宮を俺の熱で満たしていく。

「あ……、……はあつ、……んああ……っ。……あついつ……。……お腹の中、……先生
の、……いっぱい、ドクドクしてるう……っ」

ビクビクと痙攣を繰り返しながら、モモイは力なく俺の胸に突っ伏した。

結合部からは、入りきらなかった二人の愛液が、白く泡立ってシートへと零れ落ちていく。

ドクドクと鳴るお互いの心臓の音が、一つに重なり合って聞こえた。

「……はあ、……はあ。……あーあ。……また、先生に完全攻略されちゃった……」

汗だくのまま、モモイは俺を見上げて、ふにやりとだらしなく笑う。



「……最高だったよ、モモイ。……モモイの中、すごく気持ちよかった」

俺がそう伝えると、彼女の頬がさあつと林檎みたいに赤く染まった。

「……えへへ。……私も。……先生のこと、……すつごく、すつごく、気持ちよかったよ。……これ、……絶対に、他の子には譲れない『最強装備』だね」

彼女は俺の唇に、ちゅっ、と軽いキスを落とした。

「……先生。……これからも、……すつとすつと、……私と一緒に、……人生っていう名前の神ゲー、……協カプレイしてね？」

甘えん坊の猫みたいに擦り寄ってくるモモイを、俺は力強く抱きしめ返した。

俺たちの日常クエストは、これからもすつと、この最高に甘くて淫らな『隠しルート』へと繋がりを続けていくのだ。

